

本当は少しエッチな

日本昔ばなし

倉田 楽

獵師の一発

村の七十になるじいさまが、あるとき、若い女を嫁にもろたそうな。
ところが、しばらくたったころ、どうもその女房が身ごもったらしい。
自分でもふしぎに思ったじいさまは、さっそく村いちばんの物知りをたずねたそうな。
「そうじゃのう。たとえばなしで説明しようか。
あんたが山を歩いていると、突然狼がおそいかかってきたとしよう。
あんたはとっさに杖(つえ)をかまえて狼を突いたところ、なんと狼は死んでしもうた」
「ふんふん、そりゃまた、ふしぎな話じゃ」
「いんや、なんもふしぎなことはありません。あんたのうしろに腕のよい獵師がおって、
一発撃ったまでじゃ」

もの忘れ

ある日のこと、村の年寄り三人が集まって話をしておった。

歳のせいかな、寄るとどうしても出てくるのが愚痴。

三人のうち、七十三になるじいさんが言った。

「このころ、すっかり歯が弱ってしもうた。むかし食ったものは、今はもう食えん」

「それはわしも同じこと。そのうえ耳も遠くなつてのう、なんべん呼ばれても気のつかんことがたびたびじゃ」と、

八十二のじいさんもうなづきながら返事をする。

すると次に八十八のじいさまが、ため息まじりに言うことには、

「わしなんぞ、もっと大変じゃ。

ゆうべ、ばあさんが針仕事をしとったもんで、思わずうしろから抱きついていったところが、

『じいさんや、またするのかえ、さっきしたばかりじゃないか』と、こうなんじゃ。

人間、八十五を過ぎると、もの忘れがひどうて困るわい」

娘の涙

あるときのこと、奉公を終えた娘が家に帰ってきた。

ところが、母親が思うには、どうも娘の腹が大きくなったような気がしてなんねえ。

ある日、母親は思いきって娘に問いただしてみたそう。

「ちょっくらしゃべりにくいことだけんど、おまえ、奉公さ行って赤ん坊を土産に持って帰ったんと違うべか」

しばらく、もじもじしていた娘は、

「ひょっとしたらば、は一、そうかもしれねえす」

「やっぱりそうか。それで相手の男はどこのだいつだ」

娘は固く口を閉ざしておったが、やがて目に涙をいっぱいためてな

「サヨとミヨが二人してぎっちり押さえつけて・・・」

「なに・・・二人に押さえつけられた。そうか、やっぱりやられたか。

まっことサヨもミヨもけしからん女じゃ。それで、男はどこのだ何者じゃ」

母親は体をのり出してたずねたと。

すると娘は涙をふきながら、

「サヨとミヨが二人で押さえつけたのは、となり村の三平ちゅう男で、

『いやじゃ、いやじゃ』と泣いておるのを、おらが無理やりに上に乗ってしまっただ」

先生さまはおいでかね

若くてたくましい男が風邪をひいた。

じっとしていてもひどくなるっぽうなので、

若者は村にただひとつある医者へ行き、のどを押さえながら
ささやくような声で言った。

「先生さまはおいでかね」

すると、先生のおかみさんが顔だけ出して、

めくばせしながらささやくように言ったとさ。

「亭主はいまいないから、早くあがっておくれ。うちが治してあげる」